

身近なまちの風景物語(37)

みだしなみ
不断の身嗜み

歩いていると、視線の高さでハンギングバスケットの花と目が合う。足元でも、塀の向こうの庭でも、色とりどりの花が微笑んでいる。また来たねと挨拶されているような気がする。

総務省の調査によると園芸やガーデニングの行動者率は北関東3県が上位を占めている。一年間に趣味や娯楽として「園芸・庭いじり・ガーデニング」に取り組んだ行動者率である。都道府県別では茨城県が全国一位だ。

様々な要因が想定できる。平坦な土地が多く、戸建て住宅比率が高く、敷地面積が広いことが背景にある。農業環境が身近で、土に触れることに抵抗感が少ないかもしれない。

北関東が発祥の大手ホームセンターがいくつもある。自動車の保有率が高く、そうした店舗に出向く機会が多いことも影響がありそうだ。

日本家屋では、座敷から縁側の向こうにある庭園を見て楽しんだ。盆栽を嗜み、花木や草木を愛でる園芸文化がある。

1990年代以降、わが国ではガーデニングが盛んになってきた。それまでの園芸とは性格を異にする。人目につく表庭に、目立つ華麗な原色の草花を育てるのが西洋的なガーデニングである。

ガーデニング・ブームは、住宅の中から眺める庭から、家の前を通る歩行者や車窓からも眺められる庭へと変わっているようだ。

他者からの眼差しを受け止める草木や花の庭づくりには手間をかける。住まい手は自らの美意識をもとに、住まう環境を潤すしつらえに工夫を凝らす。

自分たちが楽しむほか、通りがかる近隣の人々の憩いとなるべく、花種の選定や配置などを思案する。日々の手入れは欠かせないが、他者の視線を励みにする循環が生まれている。

個人の庭であっても、道路からの視線から逃れることはできない。通りがかる人たちにとっては、丹精された多彩な庭に沿って歩くことが楽しみになる。こうした体験を促す住まい手の行為には社会的な意義が芽生えている。

野中 勝利

筑波大学 大学執行役員 芸術系長 教授



挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程2年）